# 

### 安西眞

# 1 11.4.422-45 と翻訳の試み

私たちは現在言語の違いが人間の社会的な集団 (たとえば国家)を区別するこ とが当然であるような世界に生きている。しかし、このことは現在我々にとっ ては当然のことのようにも見えるが、言うまでもなく、歴史的な事態でしかない。 たとえば次のような事実がある。古典期(ほぼ前5世紀以降のことだとする)の ギリシア人たちの間に「バルバロイ」という言葉が定着し、その言葉は、ギリ シア語を発する人間に対して、そうではない人間、ギリシア語を使わない人間 集団に属する人間たちを総称として表現する為に使われた。特にエーゲ海の向 こう、現在のトルコ半島や、さらにその向こうのペルシャのひとびとを指すの に使われた。しかし、バルバロイがギリシア語においてそういう意味で使われ たという事実は、当然のことながら、歴史的なことに属することであって、始 まりがある。ホールという、私たちと同時代に生きる、こういう社会的なこと がら、文化的なことがらと、ギリシア古典との関わりにとりわけ深い関心を寄 せる英国の女性古典学者<sup>©</sup> が主張するところに従えば、この言葉がギリシア語の 中で大きな役割を果たすようになったのは、ギリシア人とペルシャ人の間の緊 張が一気に高まった、2 次にわたる、いわゆるペルシャ戦争 (前 490 と前 480) 期がその始まりだという。本稿筆者は、彼女の指摘はその大略において正確だ と判断している。

<sup>(1)</sup> 本稿は、その最初の形態が、2006年12月に、京都大学文学研究科西洋古典学研究室と古典文献学研究会との合同研究会で最初に口頭発表された。後、2007年8月、Genevaで開催された学術振興会からの委託研究プロジェクト『教養教育の再構築』(代表:鈴木佳秀新潟大学教授)主催の国際シンポジウムに於ける、本稿筆者発表の"Tetsuro Watsuji as one of pioneering classicists in Japan and Homer's *Iliad*"の一部をなすものとして発表された。さらに、本論文に極めて近い形で、2007年10月、大妻女子大学で開催された『フィロロギカ』第7回研究集会で発表された。ご批判、ご忠告をいただいた方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

<sup>(2)</sup> E.Hall, Inventing the Barbarian, —Greek Self-Definition through Tragedy, Oxford, 1989.

彼女の洞察は、ギリシア古典期の歴史家であり、ポリス社会・国家の本質に関して極めて鋭い理解を示したトュキュディデスによる、ホメロスの世界に関する次のような指摘とも一致する。すなわち、彼によれば、ホメロスの世界では、ギリシア人という総称およびそれに対応する集合概念はいまだ成立しておらず、したがってその対立概念であり、また、必須の対をなす概念である「バルバロイ」も成立していなかったということになる<sup>(3)</sup>。

私たち現代人がホメロスを学問的に読めることを可能にしているのは、ホメロスを文字にし、書き写して伝え、同時に研究してきた、ホメロス学者たちの尊敬に値する仕事の積み重ねである。その積み重ねに、本稿筆者は畏敬の念を抱いていない、というわけではない。しかし、尊敬すべきホメロス研究が、ほぼ一貫して、トュキュディデスの指摘が持つホメロス理解に関する重大な意味を無視してきた、という欠点を指摘しないわけにもいかない。ことはホメロス理解の根底に関係していることは明らかだからだ。ホメロスの叙事詩世界が成立したその背景にある社会の世界把握がこの箇所で問題になっているのだ。

あえて欠点と断言するが、この欠点はしかし、ホメロス研究が逃れることのできなかった歴史的な環境と密接な関係にあったと、本稿筆者はひそかに想像している。だが、文献学徒としては、その歴史的な環境を議論するよりも、その欠点を指摘し、排除することが、はるかに大切な責務であると考えたい。

『フィロロギカ』第2号では、『イリアス』第9巻の、アキレウスによる戦場 復帰要請拒絶演説に背景として見える世界認識と、ホメロス研究が前提として きたホメロス世界についての像との間に齟齬があるということを、指示詞の言 語的な水準での理解の問題をつうじてあきらかにすることを試みた。

今回、議論する『イリアス』第4巻422-445は、かの箇所よりもはるかに鮮明に、 ホメロスの叙事詩世界そのものと、研究者たちの想定するホメロスの世界とが、 人間集団の構成原理をめぐって齟齬を見せている箇所であると本稿筆者は考え ている。まず、本文と試訳を提示する:

΄Ως δ΄ ὅτ΄ ἐν αἰγιαλῷ πολυηχέϊ κῦμα θαλάσσης 
ὄρνυτ' ἐπασσύτερον Ζεφύρου ὕπο κινήσαντος· 
πόντῳ μέν τε πρῶτα κορύσσεται, αὐτὰρ ἔπειτα 
χέρσῳ ὑηγνύμενον μεγάλα βρέμει, ἀμφὶ δέ τ' ἄκρας

<sup>(3)</sup> Th. 1.3

κυρτὸν ἐὸν κορυφοῦται, ἀποπτύει δ' άλὸς ἄχνην. ώς τότ' ἐπασσύτεραι Δαναῶν κίνυντο φάλαγγες νωλεμέως πόλεμον δέ· κέλευε δὲ οἶσιν ἕκαστος ήγεμόνων οἱ δ' ἄλλοι ἀκὴν ἴσαν, οὐδέ κε φαίης τόσσον λαὸν ἕπεσθαι ἔχοντ' ἐν στήθεσιν αὐδήν, (430)σιγή δειδιότες σημάντορας άμφὶ δὲ πᾶσι τεύχεα ποικίλ' ἔλαμπε, τὰ είμένοι ἐστιχόωντο. Τρώες δ', ώς τ' ὄϊες πολυπάμονος ἀνδρὸς ἐν αὐλῆ μυρίαι έστήκασιν άμελγόμεναι γάλα λευκὸν άζηγὲς μεμακυίαι ἀκούουσαι ὅπα ἀρνών, ώς Τρώων άλαλητὸς άνὰ στρατὸν εὐρὺν ὀρώρειού γὰρ πάντων ἦεν ὁμὸς θρόος οὐδ' ἴα γῆρυς, άλλὰ γλώσσα μέμικτο, πολύκλητοι δ' ἔσαν ἄνδρες. ὄρσε δὲ τοὺς μὲν Άρης, τοὺς δὲ γλαυκῶπις Ἀθήνη Δεῖμός τ' ἠδὲ Φόβος καὶ Ἔρις ἄμοτον μεμαυῖα, (440)Άρεος άνδροφόνοιο κασιγνήτη έτάρη τε, ή τ' όλίγη μὲν πρώτα κορύσσεται, αὐτὰρ ἔπειτα οὐρανῷ ἐστήριξε κάρη καὶ ἐπὶ χθονὶ βαίνει· ή σφιν καὶ τότε νείκος ὁμοιίον ἔμβαλε μέσσω έρχομένη καθ' ὅμιλον ὀφέλλουσα στόνον ἀνδρῶν.

まるで(その様子は)、とどろき渡る岸辺で、大海の波が、 突き動かす西風を受けて、次から次へと立ち上がる時のようだった。 沖合で、波はまず盛り上がる。そして次に、 砂の上に砕けて、大きな波音をあげる。(大地が)岬状になったあたりでは、 弓状になって進みながら、波頭を岬の上にせり上げて、塩辛い泡を吐き出す。 ちょうど、そのように、その時のダナオイ勢の隊列は次々と、絶え間なく、 いくさの場所へ向けて動いて行った。彼らを、隊長らのそれぞれが 指揮をする。彼らの方は、黙ったまま進むのだ。誰も、これほどの数の 兵が、胸の内に声を押さえ込んだまま、後を進んでいるとは思わないほど 静かに。指揮官を怖がっているのだ。それぞれが身にまとって隊列に加わった

一方、トロイア勢の方は、物持ちの家の中庭に、無数の羊たちが

その武具がそれぞれの兵士の周囲で、光を放っていた。

集まって来て、白い乳を搾られる順を待って、立ち並んでいるかのようであった。 牡羊たちの鳴き声を耳にしては、ひっきりなしにメエメエと鳴くのだ。 そのようにトロイア勢の叫び声が、陣営じゅういたるところであがっていた。 なぜなら、彼らすべての声は同じではなく、ひとつでもなかったからだ。 発言は、混じりあったもので、男たちは多くの語りかけを受けていたからだ。 ある者はアレスが気持ちをかき立てる。ある者は輝くまなこのアテネがそうする。 デイモスとポボスとそして、ひどく熱心にことを追究するエリスも加わる。 男を倒すアレスの妹で(戦の際の)仲間でもあるエリスもである。 彼女(エリス)は、頭をもたげても最初は小さい。 しかし、やがて頭を大空に高くかざして、大地の上を歩むのだ。 彼女はこの時も兵士たちの真ん中に心をひとつにまとめる敵愾心を投げ込み、 人ごみの中で、男たちのうめき声を育てた。

#### 2 本試訳と伝統的な理解との大きな違い

上の試訳はこの一節の伝統的な理解とかなり根本的に違っている。その要所では、訳に下線が施してある。本稿の目的はもちろん、大胆に伝統的な理解と異なるこの試訳を弁護することにある。また、その訳の文脈全体の理解を弁護し、正しい文脈把握であることを主張することにある。しかし、本文の立て方というものを雑誌『フィロロギカ』の中心に置くとするならば、例えば、『イリアス』の最新の校訂版であるウェスト版と表面的には異なることはたったひとつでしかない。

ウェスト版 は、439 行で字下げを採用している (他に上に挙げた本文と違う 点はその字下げの対象となった単語の加音の扱いにもあるが、それは本稿の問題とは関係のない、音韻論形態論上の問題である)。本文の立て方という点では、少なくとも表面上は、小さな違いでしかないように見える。しかし、本文の立て方というものが作品のある部分の文脈と深く関わっている種類の問題である場合(まさしくここはその問題が中心にある)として上にあげた本文を見れば、この字下げは、文脈理解に関して決定的なことを語っている。ウェストは、439以下は、その前のトロイア勢についての詩行と続かないと理解すべきだと、字下げによって主張しているのだ。つまり、439以下にはアカイア勢に対する描

<sup>(4)</sup> M.L.West, *Homeri Ilias*, Leipzig, 1998 (vol.1), 2000 (vol.2).

写も含まれている(後述参照)と彼が読んでいると見て間違いない。そして、この理解の仕方は、後で指摘するであろうように、この二つの比喩を含む文脈を理解するのに際して古代からほぼ一貫してそのようにされてきた読み方を、さらに鮮明にさせたものだと言える。その点がまず疑問だと、本稿の筆者は言いたい。

ともあれ、以下の議論を分り易くする為にも、本稿筆者訳と伝統的な理解と 了解される読み方の違いをまず鮮明にしておきたい。以下、箇条書きで違いを まずあげる。

- 1 γλώσσα を、民族その他の人間の集団を分けるめじるし(いわゆる使用言語) とは本稿訳は理解しない。一方、伝統的な理解では、民族・国家を分けるものという役割を与えられている。
- 2 πολύκλητοι を、『多くの場所から呼び集められた』という意味で、これまでは 理解してきた (LSJ もその訳だけをこの箇所に関してはあげている)。しかし、 本稿訳は、試みだが、πολύ- を、語構成上は、-κλητοι に含まれる動詞の内的 目的語として読もうとしている。
- 3 τοὺς μὲν...τοὺς δὲ (439) を、前者はトロイア勢を指すものとし、後者をアカイア勢を指すものとして伝統的には読んで来た。これがウェストの字下げの根拠のひとつである。しかし、本稿筆者はこの理解は、言語的にも、文脈的にも成立させることが難しいと判断する。そして、両者ともにトロイア勢に属するものたちを指す、というように理解すべきだと考えている。

以上が表面的な違いである。もちろん、表面的と言ってもここの箇所で、特に2つの比喩を使って詩人が何を表現しようとしているかということに関して決定的な違いを両者は持っているということも出来る。しかし、さらにその奥に『イリアス』の世界が何か(あるいはもっと具体的に言えば『イリアス』の世界にとってトロイア人たちが何を意味しているか)ということに関して、私の言い方をすれば、伝統的な理解はある決定的な難点を持っていて、その深い根がここにも顔を出している、と思える。もう少し客観的に言えば、そういったことがらに関して試訳と伝統的理解は大きな違いを持っている。しかし、このことは、『フィロロギカ』的議論が終わって余裕があれば触れるという形にしたい。

おそらく、3の問題から追っていった方が問題は解きほぐし易い、というの

が見通しであるが、その問題に実際にとりかかる前に、I と 2 に関して、具体的な文脈理解の問題以前の段階で、既に語の水準で、見えている問題だけは指摘しておいた方が議論はより分り易いかもしれない。

# 3 伝統的な理解の単語理解の上での問題点—(1)

γλώσσα について:この語が民族・国家を分ける際のめじるしとして使われている例がホメロスに皆無という訳ではない (II.2.803-4)<sup>(5)</sup>。しかし、言うまでもなく、「舌」が、民族・国家を分ける役割を果たす「言語」としてではなく、民族・国家の意識をのぼらせていない段階のたんなる人間同士の交流手段としての「ことば」あるいは「ことばを発する能力」として使われた次のような例 (II. 2.488-9) が少くともホメロスにおいては大多数である。

πληθὺν δ' οὐκ ἂν ἐγὼ μυθήσομαι οὐδ' ὀνομήνω, οὐδ' εἴ μοι δέκα μὲν γλώσσαι, δέκα δὲ στόματ' εἶεν,

もちろん、『イリアス』に他の類例がたとえ 1 例でも見つかる以上、人間の社会的な集団を分けるめじるしとしてここ (II.4.438) でも使われているのだ、という理解は成立しうる。しかし、類例の分布を考慮すれば、ここの γλώσσα の用法を本当に伝統的な読み方に従って理解してよいのかという疑問ぐらいは提出されたことがあってもよいと思われるが、私は過去においてその種の疑問が真剣に発せられたということをを聞かない。ホメロスの叙事詩が成立した前後においてギリシア人は「ギリシア人」という一般概念も持っていなかったし、当然その対立概念であるバルバロイという概念をも持っていなかった、というトュキュディデスの洞察を考慮に入れるならば、もっと深い疑念が伝統的な理解の仕方に対して投げかけられてしかるべきであろう。

# 4 伝統的な理解の単語理解の上での問題点—(2)

<sup>(5)</sup> πολλοὶ γὰς κατὰ ἄστυ μέγα Πριάμου ἐπίκουροι, ἄλλη δ' ἄλλων γλώσσα πολυσπερέων ἀνθρώπων· 「なぜなら、プリアモスの大きな町には大勢の兵士たちがいて、 大地に多くまかれた人たちの言葉は、それぞれ異なっているから。」

πολύκλητοι について:この語を、『多くの場所から呼び集められた』という意味に解するのは、語構成を考えればいかにも異様である。もちろん異様であるのは、πολυ-の意味を「多くの場所から」と理解することが、である<sup>(6)</sup>。πολυ-は、数あるいは量を表現する形容詞あるいは副詞の幹として使われたから、もう一方の幹が名詞なら、「…が多い」(πολύβουλος「思案が多い (Od.16.282)」など)が普通の意味であろうし、もし、幹が動詞なら、その動詞の表す動作の主語、目的語、内的目的語(つまり、数量副詞)をπολυ-が受け持つのが普通であろう。しかし、私には異様なものと感じられるこういう理解の仕方には、『イリアス』中の類例があるとされている:

όσσαι μὲν Τρώων πυρὸς ἐσχάραι, οἶσιν ἀνάγκη οἶ δ' ἐγρηγόρθασι φυλασσέμεναί τε κέλονται ἀλλήλοις· ἀτὰρ αὖτε πολύκλητοι ἐπίκουροι εὕδουσι· Τρωσὶν γὰρ ἐπιτραπέουσι φυλάσσειν· οὐ γάρ σφιν παίδες σχεδὸν εἴαται οὐδὲ γυναῖκες. (II.10.418-22)

ここでも、πολύκλητοιは「多くの場所から呼ばれた」という意味で使われているとされている。そして、ここでは文脈とその意味は (特に Τρωσὶν で始まる後続の文を見よ)合致しているかに見える。だからといって語構成から考えてこの意味が異様であることは変わりがない。我々の文脈での意味と違って、この10巻では、深刻な文脈理解の上での問題を引き起こしているとは言えないが、それでもこの形容詞の意味が変だという事実には変わりがない。だが、この問題は、本稿の問題にとって副次的なものであるので、中心的な議論が一段落してから触れることにしよう。

#### 5 これらの理解の歴史的な背景―エウスタティウスの注とアポロニウスの語釈

私は、我々の約20行ほどは、根本的に間違って理解されて来た、と考えている。それも、間違い方は一様の方向に向いていると言えるだろうと思ってい

<sup>(6)</sup> 実は、ap.cr. を見ても分るように、この合成語の後半の構成要素 κλη-/κλει- についてもかなり深刻な疑問がある。しかし、この問題についてはここでは棚上げにすることにする。伝統的な読み方の問題点を指摘し、正しいと思える方向を示唆する、ということに本稿の目的を限定したい。

る。文脈的な水準でその間違いはこういうことである。詩人はトロイア軍を「羊のように多様な声を出す」と言っている。それを伝統的には、トロイア勢は言語に関して混成的であるから、と続くと理解して来た。すると、「羊のようなトロイア勢」という表現には一応の論理的な結末が付けられてしまうことになる。439以下がトロイア勢に関する詩行として続けられているという読み方には当然合理的根拠が欠けるのだ、ととられ易い。

そこに、アレスとアテネが登場する。アテネは多く親アカイア的振る舞いを『イリアス』ではしている。従って話の舞台の表面にアカイア勢が登場してきた、つまり、439 行以下は全体としてトロイア勢とアカイア勢を対象としている部分だ、という読み方が成立することになる。そこでこの理解を明確にするには、ウェストのように字下げを施した方がよい、ということになる。

これが間違えた読み方だということは今あげた語釈の問題にもかなり明確に出ていると言えるだろう。問題3の議論を始めればもっとはっきりしてくるだろう。なぜ一様の方向に向いているかと言えば、それはこの間違えた理解がある伝統的な読み方に従ってきたからであり、その伝統的な読み方の根っこにある、ある傾向を踏襲して来たからであると本稿筆者には思える。こういった読み方が伝統的な読み方であることは例えば以下のような古代末期と中世の学者たちが残した『イリアス』理解等を挙げればあきらかになるだろう。

#### Eustathius ad 437-8<sup>(7)</sup>

«Οὐ γὰο πάντων ἦεν ὁμὸς θοόος οὐδ' ἴα γῆους, ἀλλὰ γλῶσσ' ἐμέμικτο, πολύκλητοι δ' ἔσαν ἄνδοες», ἤγουν ἐκ πολλῶν συγκληθέντες γλωσσῶν. οἱ γὰο Ἑλληνες ὡς ὁμόγλωσσοι κτλ.

Apollonius Sophista, *Lexicon Homericum*<sup>(8)</sup>, s.v. πολύκλητοι: ἀπὸ πολλῶν τόπων κεκλημένοι βοηθεῖν.

エウスタティウスとアポロニウスが我々の部分に関してどのような文脈理解をしていたか、ということには触れない。多分、これまでの説明でおおよその理解のありようは想像がつくだろうと思う。彼らの読み方にひとびとは従って

<sup>(7)</sup> Eustathius, Commentarii ad Homeri Iliadem Pertinentes, ed. van der Valk, Leiden, 1971, 1.783

<sup>(8)</sup> Apollonius Sophista, Lexicon Homericum, ed. Bekker, Berlin, 1833, 132

来たという事実も、ウェスト版の字下げを指摘すればじゅうぶんとも思えるが、 念の為に、最新の『イリアス』注釈のスタンダード版 (ケンブリッジ大学版)の カーク<sup>®</sup> も上に指摘したような「伝統的な読み方」に完全に従った記述を見せて いることを付け加えておこう。

#### Kirk ad 4.439

"As usually but not invariably in Homer, the  $\mu \acute{\epsilon} \nu$ -clause refers to the last to be named of a preceding pair (here, the Trojans) and the  $\delta \acute{\epsilon}$ -clause to the first, in a chiastic arrangement. Ares is Athene's pro-Trojan counterpart as war-deity."

#### Kirk ad 440-1

"Despite the close relationship of Eris, Strife, to pro-Trojan Ares, these three are to be understood as spreading the spirit of war among both sides equally."

論文を、効果的に組み立てる為の戦術的な意図から、意図して同一のことがらを論じていない部分を引用した。前者は、439以下では、トロイア人たちのことばかりではなく、アカイア勢のことも歌の文脈に入って来ていることをカークが読んでいることを示している。後者は、440以下に登場するデイモスやポボスやエリスが、両陣営の兵士たちに襲いかかるのだ、と理解していることを示している。この読み方は、439の字下げと合致する読み方であり、それはまたγλῶσσα (438) や πολύκλητοι (438) に関する伝統的な読み方と根っこのところで繋がっていることを理解してもらえばよい。そして、カークは、注釈者であるからこそ上のような理解を 439 や 440-1 について詳しく述べなければならなかったのだが、そのことによって彼のこの注釈は伝統的な読み方が含む解釈上の根本的な難点をあからさまにしているのである。

#### 6 本稿訳の弁護—(1)

以下、「伝統的な読み方」がギリシア語の誤読の上に成り立っていることを明らかにし、それに代わる正しいと思われる方向を示したい。伝統的な解釈に代わる新解釈の総体を提示しようというつもりなのではない、ということを断っておきたい。

<sup>(9)</sup> G.Kirk, The Iliad: A Commentary, vol.1, Cambridge, 1985.

「伝統的な読み方」が破綻するのは 439 行以下の部分である。ここで「伝統的な読み方」は、上述のカークを見れば分るように、τοὺς μὲν Ἄρης (439) の τοὺς はトロイア勢を指し、τοὺς δὲ の τοὺς はアカイア勢を指す、と理解する。その読み方自体は『イリアス』の世界と一見合致したものように見える。つまり、既に言ったようにアテネはおおむね常に親アカイア的な女神であるし、アレスは親トロイア的であると私たちは『イリアス』全体の印象から感じている。

しかし、この理解は、いかにも唐突な変化を私たち読者に要求するものである。これまで、詩人は聴衆にトロイア勢を見渡した視線を要求して来た。それを突然、トロイア勢とアカイア勢を同時に眺められる視点へと移動するよう詩人はここで要求していることになる。「伝統的な読み方」に従うならば、である。両勢はまだぶつかり合っていない。徐々に近付きつつあるとはいえ、まだ離れた場所にいるのだ。その転換をホメロス叙事詩が、ǒgos δè (439) の δè ひとつで実現するものであろうか。あるいは、トロイアに関する 438 までに区切りを付ける何らかの formula 詩行なしで成し遂げ得るものであろうか。

しかしこのことに関してはこれ以上追求しない。「たしかにギクシャクしている」、という譲歩が「伝統的な読み方」の側から得られるのがせいぜいであろうから。

問題はデイモスやポボスやエリスがいったい誰に襲いかかるのかを考えた時に決定的になるように思える (先にあげたカークの 440-1 への注参照)。これらの神々が襲いかかるということが、これらの神々が意味するある戦士としての感情を持つということであるとしたら、こういう戦場での感情の動きを示したのは誰なのか。上で引用したカークのごとく、τοὺς μὲν Άρης (439) の τοὺς はトロイア勢を指し、τοὺς δὲ .. Ἀθήνη (439) の τοὺς はアカイア勢を指す、と理解すると、例えばデイモスはどちらの側を ὄρσε すると読むべきなのか。

カークは、2 つめの引用でデイモスやポボスやエリスが襲いかかるのは双方だと読むべきだと明言している。全く恣意的な読み方を我々に勧めていると私には思える。τ' ἡδὲ (440) と καὶ (440) は、基本的には単純な付け加えを意味していて、それ以上の機能を果たすことはできないはずである。τοὺς δὲ の τοὺς はアカイア勢を指していたのに (少なくとも「伝統的な理解」ではそのはずである)、次の行では両者へ掛かるというような人工的な、あるいは込み入った機能を果たすことは出来ない。そう私は確信する。だから、恣意的だと言っている。

まだ、3体の神々がいずれもアカイア勢に関与する、という読み方の方がま しとも思えるが。誰もそう読もうとはしていないようであるし、多分それには それなりの根拠があるのだろう。もちろん、本稿筆者もそちらに活路が見出せるとは考えていない。

これは簡単な論理の問題なのである。今、詩人が歌っている対象としては、 直前にはトロイア勢がいる。そして、その集団がいままさにぶつかろうとして いるアカイア勢がおり、これを、詩人は比喩を使って進軍する様を表現したし (422-438)、詩人と聴衆の意識の中心にまだいることは間違いない。

もし仮に百歩譲って、ὄφοε δὲ の δὲ ひとつでトロイア勢を見据えた位置から、トロイア勢とアカイア勢とをともに見据える位置へと視点を転換できた (普通に言えば、テーマの転換)としても、トロイア勢を一方とし、アカイア勢を一方とする分割を実行したとたんに、『イリアス』がこの文脈で歌うことのできる対象たる人間たちはこの分割ですべて尽くされてしまって、唯一可能なのは、カークの言うような両者をまとめた別の集団か、あるいはまた、アカイア勢を対象とした部分が続くという可能性である。もし、どちらも受け入れがたいと言うのであれば、分割の前提たる全体そのものを疑うべきなのだ。

それが試訳成立の前提である。つまり、百歩譲らない。τοὺς μὲν Άρης (439) の τοὺς はトロイア勢を指し、τοὺς δὲ の τοὺς はアカイア勢を指す、というような「世界の分割」は実行しない。必然的に、歌われる対象はあいかわらずトロイア勢であって(もちろん、ὄρσε δὲ の δὲ はこの機能を果たせる)、τοὺς μὲν Άρης (439) の τοὺς も、τοὺς δὲ .. Ἀθήνη の τοὺς もトロイア勢を指す、という理解になる。トロイア勢のある者はアレスが心をかきたて、トロイア勢のある者はアテネが心をかきたてた。デイモスやポボスやエリスがかき立てるのもいた(いずれも対象はトロイア勢)。つまり、トロイア勢の中には戦意を高揚させた者もいたし(アレス、アテネ、エリス)、臆病風にいったん吹かれた者もいた、というのだ。

上の説明は集合論の言葉で説明しようとしたからややこしく聞こえたかも知れないが、事態としてはギリシア語を読むひとなら簡単に理解できることだろう。ギリシア語を読めなくとも、日本語訳だけでも理解できただろう。わざわざ集合論の言葉を使って説明したのは、むしろ、これまでの「伝統的な読み方」が『イリアス』を読むに際してどういう枠組みを前提としてきたかを明らかにする為もあった。つまり、トロイア勢があり、「舌」が混じっていた、とホメロスが言えば、それは、トロイア勢の言語的雑多性を表現しているに違いない、とひとは読んで来たのであり、「あるものたちはアレスがあるものたちはアテネが」とホメロスが言えば、それはトロイア勢とアカイア勢の別々の集団を指し

ているに違いないと思い込んで読んで来たのだ。まわりにどんな警戒警報が鳴っていようとそれ以外にありえない、と読んできたのである。

もちろん、「伝統的な読み方」にもそれなりの根拠はある。先に触れたように、アレスは親トロイア勢、アテネは親アカイア勢という立場は、『イリアス』に貫徹されていることのようにも思えるからである。しかし、次のような場面が『イリアス』にもあることを忘れてはならない(*II.*18.516-9):

οἳ δ΄ ἴσαν· ἦρχε δ΄ ἄρά σφιν Ἄρης καὶ Παλλὰς Ἀθήνη ἄμφω χρυσείω, χρύσεια δὲ εἵματα ἔσθην, καλὼ καὶ μεγάλω σὺν τεύχεσιν, ὥς τε θεώ περ ἀμφὶς ἀριζήλω· λαοὶ δ΄ ὑπολίζονες ἦσαν.

これは『アキレウスの盾の描写』中に描かれた一場面である。河堤での戦いに至る部分でこういう描写がある。一方の側の軍隊の前にアレスとアテネが連れだって現れる。二体の神は、同じくその一方の側の兵士たちの心を励ましている。ここでは両神は、アカイア勢に加担したり、トロイア勢に加担したりする神ではなく、戦おうとする戦士たちの前に、どちらかの側のひいきの神としてではなく、戦意を高揚させる戦の神として現れている。そして恐らく間違いなく、アレスとアテネの神としての性格は基本的には闘争心を象徴する戦神だったのであろう。両神ともに『イリアス』の中では比較的一貫してそれぞれのひいきを援助する役割を果たしているが、それは、『イリアス』中でどちらがどちらを味方するかが文脈のひとつの焦点として重要である場合の役割にしかすぎない。戦を象徴するあるいは戦意の象徴として働く神としての原始的な性格は、必要とあればどこででも顔を出すことができるのだ、と理解するならば、ここに無理矢理アカイア勢を登場させてそれに続く文の理解を難しくする必要はなくなる。

それとも、ひとつの兵士の集団がここ (439-445) で登場しているのではない、 どうしてもアカイア方とトロイア方が同時に歌の対象として眼前に登場してい る、と言うべきだろうか。ありもしない切れ目を作り出し、字下をし、集合論 理の基本的な問題を無視してまで。言うまでもなく、本稿筆者はギリシア語の 指し示すすなおな読み方に従うべきだと考える。

さらに、439 行以下にアカイア勢を登場させない読み方は、単に論理の面に おいてばかりではなく、最初に掲げた2つの比喩と呼応しあうという意味で、 極めて「文学的」な意味でも優れた読み方であると私は考えている。

## 7 本稿訳の弁護―(2):怒濤の軍隊と羊の軍隊

γλῶσσα μέμικτο をトロイア方の兵士たちの使用言語が入り交じっていたことと理解し、それに応じて πολύκλητοι を「多くの場所から呼び集められた」という意味で取る、という「伝統的な読み」は、アジア人、特にトルコ人や、オリエント世界の人間との深刻な対立が生じて以降の古代、古代末期および中世のギリシア語圏に住む人間たちを抜きがたい形で支配して来た、かの地のひとびとに対する偏った態度に端を発しているのであろう。この偏見は前述のホールが指摘するところであるが、その偏見が我々の議論してきた文脈の伝統的な読み方にも反映されてきた、といったんこれまでの議論をまとめることができるだろう。

ただ、ここでは、あくまでも2つの比喩を使った文脈全体を正確に理解したいと望んでいるので、そういう読み方がどういう文脈理解の上での事態を引き起こしているかに絞って見ていくことにしよう。

γλῶσσα μέμικτο を使用言語が多岐にわたっていた、と読んでしまえば、既に言ったように、トロイア方の兵士たちが「集められた羊のようだ」という比喩が喚起した想像上の力はそこで閉じてしまう。「羊のようにうるさい」と「多言語で交流をしていた」は一方が一方を完全に説明してしまう役割を果たしてしまって、論理は完結するからである。字下を決定した根拠、すなわちトロイア方の兵士たちに対する描写はいったん終わった、という理解は、アレスとアテネが連れだって登場するから、だから、アカイア人のことが詩人や聴衆の意識に上ってきているに違いない、という思い込みだけで生じたのではない。438行で「羊のようなトロイア方の兵士たち」という像が生じたが、その像は438行でいったん閉じたという判断にも依っている。多分これで、γλῶσσα μέμικτοや πολύκλητοι の意味に関する「伝統的な」意味理解と、439行から新しいパラグラフが始まるという判断とは互いに密接に支え合っている関係にあるという、やや飛躍があるように聞こえたかもしれない本稿の言い方が理解できたのではないか。

さて、438 行でトロイア人に関する、比喩が喚起した文脈が閉じたとする理解が誤読である可能性が大きいとすれば、私たちはここにどのような文脈が生じていると考えるべきだろうか。それよりも前に 439 行以下が、先に触れたよ

うにトロイア方の兵士たちにだけ関わる描写であるとして、γλώσσα μέμικτο や πολύκλητοι という語の意味理解を中心とする理解はどうあるべきだろうか。

既に答えは冒頭の訳で提示している。γλῶσσα μέμικτο は「発言は、混じりあっていた」と読み、πολύκλητοι は「多くの語りかけを受けている」と理解する。 γλῶσσα については簡単にコメントしておきたい。「舌」を人間の集団を、典型的には国家単位で分ける為のめじるしとしての言語ではなく、「言語音」あるいは人間の思いを表現する「ことば」という意味での言語を意味するものと理解する。これはホメロスで大多数の箇所で使われている意味である(前掲11.2.448-9 参照)。

πολύκλητοι については少し詳しい説明が必要であろう。上の本文で印字したように、πολύκλειτοι ではなく、この形を採用するべきだと今は判断している。 そのあたりを説明したい。まず、-κλητος はホメロス以降多用されている形だということを告げておこう。

ここの πολύκλητοι の「伝統的意味理解」の根拠のひとつとなっている、 II.10.420 で使われている、同一形で印刷され、ほぼ同じく「多くの場所から呼ばれてきた」という意味を比定されている πολύκλητοι について、ここで必要な脱線を試みる。

τηλεκλειτός という形容詞がホメロス中に使われている。いくつかの叙事詩の登場人物の固有名詞 (Epialthes, Od.11.308 など) にかかる形容詞として行末に使われている (×3)。そしてここで重要なことは、ἐπίκουροι とともに (複数主格で×3、複数属格で×2)、τηλεκλειτοὶ τ' ἐπίκουροι、あるいは、τηλεκλειτῶν ἐπίκουρων という形で「男のカエスラ」からの後の hexameter 行を構成する。固有名詞との場合を詳しく検討する必要はないだろう。τηλεκλειτός という形容詞は、叙事詩に登場する固有名詞とともに、あるいは、叙事詩に極めて頻繁に登場する人間の種類を表す普通名詞とともに epithet として使われたのだ。「その名声が遠くまで聞こえた」という意味も英雄叙事詩にとって、「輝く」とか、「足の速い」とかと同様極めてふさわしいものであることも、言うまでもない。

II.10.420 の πολύκλητοι の意味を、「多くの場所から呼ばれた」と取るのは、 語構成上極めて疑わしいと思われることについては既に述べた。「多くの場所から呼び集められた」という意味は、4.438 においては、本稿の見方からすれば、 既に明らかになったごとく、誤った文脈理解の上に立っているように見えるが、 一方、ここ (10.420) では適当なものであるようにも見える。少なくとも、語構 成の問題を抜きにして、文脈に相応しいかどうかを考える限りは。「多くの場所 から呼び集められた者たちは(警備につかないで)眠った」と「トロイアびとらに警備を託した」と「被保護者を連れてきていなかった」はうまくふたつのγὰQでつながるようにも見える。しかし、少し考えてみれば分るが、「多くの場所から呼び集められた」は必ずしもここで必要な意味ではない。ἐπίκουροι「助っ人」は、そのもともとの意味からして、「そこに守るべき被保護者を持っていない」という意味を担うことが出来るからである。

以上をまとめて、今のところの、II.10.420 の πολύκλητοι について結論的な推定を言う。-κλητοι と -κλειτοι を、使い分けるならば、ここ (II.10.420) では πολύκλειτοι と印字すべきであって、意味は τηλεκλειτός の epithet 的意味に準じて「極めて名高い」とすべきである。実際、Pi.O.6.71 ではその意味で使われている。「準じて」には、確かな実体がある。II.10.420 の πολύκλειτοι の使われ方を見てほしい。ほぼ、τηλεκλειτοὶ τ' ἐπίκουξοι の metrical variant と言ってよい使われ方と言ってよいだろう。ただし、τηλεκλειτοὶ τ' ἐπίκουξοι と違って、τ' は使われていないし、使えない文脈にある。hiatus は、いくつかの写本に見える修正の試みにもかかわらず、避けられない状況にある。少なくともこの使い方に関するかぎり、ここの詩人は、formulaic language の正統な伝承からはずれるところに居ると言える( $^{(10)}$ )。

一方、4.438では、「極めて名高い」では意味をなさず、本稿試訳のような訳がどうしても必要だと判断される。従って印字したように、-κλητοι と -κλειτοι を、使い分けるならば、πολύκλητοι とするべきだろう。そして、言うまでもないが、その韻律上の位置(カエスラの直後)にもかかわらず、τηλεκλειτοὶ τ' ἐπίκουροι という formulaic な半行との関連はほとんどない。formulaic language と関係が非常に薄いという感想は、*II.4.422-445*の前半を成す 2 つの比喩全体の文体について誰もが抱く感想でもあろう。

最後に、本稿による試訳が作りだした、激突の直前に至る2つの比喩を中心 とする部分全体をながめてみよう。

ここでは2つの軍隊のありようが比喩を使って表現されている。439 行以下がトロイア勢に対する描写であるという理解を失ってしまえば、波の立てる規則的な音と、互いに意思を疎通させる手段を欠いた集団が立てる、いわば外側の対比だけが残り、439 行以下の役割は不透明なままである。なにしろ、439

<sup>(10)</sup> epithet + noun の格変化は起きていないが、ここで見られる現象は、Hoekstra の 名付けるところの conjugation of formulae に近いとも言える。A.Hoekstra, *Homeric Modifications of Formulaic Prototypes*, Amsterdam, 1965, 88-9 参照。

以下は誰を描いているのかさえよくわからないということであるから。しかし、そうではなくて、439 行以下は、敵を目前にした際のトロイア勢を相変わらず描いているとしたらどうであろうか。個々の兵士の感じる様々な感情、自由に、言い換えれば統制のきかない状態で全軍をおおっている状態から、敵の姿がより間近く見えて来るに従って、エリス(敵愾心)が働いて、そのエリスが彼らを戦い得る集団へと変えていく過程を描いていることになるのではないか。同じく戦闘開始の瞬間へむけて両軍が激突へ近付く過程を描きながら、戦闘を支える兵士たちの根拠の部分、心理の部分で詩人は対比を作り出そうとしているのではないだろうか。

核心は、指揮官をこわがって、次々と押し寄せる波のように「規律」を守っ た行進をし、自分たちの感情を抑えて沈黙を守るアカイア勢と、羊のように自 分の心に湧き起こる感情のままに言語を発するトロイア勢 ( やがてトロイア勢 も敵が近付いて来るのを前にしてエリスから、恐怖を忘れ戦闘集団としての体 をなしていくのだが)という対比であろう。どちらも結局は戦場で激突する。 しかし、そこまで兵士たちを引っ張っていくものが違うのだ。アカイア勢を導 くのは言葉の原初的な意味での discipline ということであろう。アカイアの軍隊 を支配するのは規律と規律を貫く為の訓練だと理解せよ、と詩人は我々に迫っ ている。トロイア勢を敵の前にまで連れていくのは、規律ではない。訓練でも ない。兵士たちのある部分は恐怖を感じて逃げ出そうとまでした、とこの文脈 は明らかに歌っている。それでも戦いは始まった。なぜなら、迫り来るアカイ ア勢に対する敵愾心がすこしずつトロイア方の兵士たちに浸透してゆき、つい には全軍を支配し、その敵愾心は空高くそびえ立つほどになる。そういう過程 がここでは歌われている。つまり簡単に言えばトロイア勢の軍隊は、よく言え ば自由、悪く言えば規律と訓練の行き届いていない軍隊だということを歌って いるといってよい。行き届いていないどころではないかも知れない。もしも、 エリスやデイモスやポボスといった神の存在が多かれ少なかれトロイアの兵士 たちの内心の状態と関係を持っているとすれば、アカイア勢との戦場に参加す るかしないかさえ、トロイア方の兵士たちにとっては、その心の動きのままで あったということがこの文脈では含意されていると言うことすら出来る。おお まかに言ってこういう対比が、怒濤のようなアカイア勢と羊の群のようなトロ イア勢という2つの比喩を中心とする我々が扱っている文脈では意図されてい ると本稿は読む。

軍隊の組織は、文明ないしは社会の組織と深い対応関係を持っている。軍隊

の組織化が進み、軍が効率的になるということは文明の進歩、あるいは社会の高度化が進むということとかなり厳密に平行する関係にある。これは、我々が愛するギリシアの世界においても真実である。だから、古典期以前(おおよそ前6世紀より前ということにここではしておこう)にも古典期にも、disciplineに従うということは、詩人や歴史家や弁論家といったひとびとの残した書き物のいつも大きなテーマであり続けた(\*\*)。古典期ギリシアの極めて高い文明を維持するということと、disciplineの行き渡った軍隊を持つことはほぼ同じことであると、彼らギリシア人は自覚していたと言ってよい。そして軍隊のdisciplineに従うことと、ポリスを支配する法に従うことが平行する関係にあることも。もうこれ以上、一般的な発言を続けるのはやめよう。本稿筆者は、文明と軍の規律に関わる関係についての洞察に近いものが、ここで詩人が作り出している対比的な比喩には、その表現効果として意図されている、と理解したい。その根拠は以下のようなものだ。

『イリアス』に登場するトロイア勢が、この叙事詩にとって持っている意味に関して、ホールの説に従うならば、前 480 年以降、ひとびとは誤解して来たという事情のひとつの局面を本稿は、一部ではあるが明らかにした、としよう。『イリアス』を正確に読むには、ギリシアとトルコ、ギリシアとペルシアというような後に成立した民族差異を時代錯誤的に持ち込んではいけないのだ、ということの一部を明らかにしたとしよう。しかし、一方で、この比喩にも明らかなように、『イリアス』には、トロイア勢をある対照の極として定位しようという傾向ははっきりと見える。では、その対照とは何と何についてのものであろうか。文献学的・言語学的な本稿の「文脈」を明らかにするという目的に沿う限りで簡単に触れたい。

対照は、民族的・国家的なそれではなく、ギリシア語英雄叙事詩の立つ世界

<sup>(11)</sup> たとえば、Tyrt. frg.10-West 15-18 に見える、「若者たちよ、戦列を離れるな、逃亡を考えるな」という教化を見よ。あるいは、与えられた戦列上の位置という意味が拡大するが、レオニダスの率いるスパルタ兵 300 を中心とする部隊がテルモピュライという与えられた部署を守って全滅にいたる、ヘロドトスによる感動的な記述 (Hdt.7.198-233) を思い起こしてほしい。あるいは、アルキビアデスの息子の戦線離脱罪の嫌疑をめぐるリュシアスの弁論 (Lys.14) も。これらが、「戦列を離れるな」という命題に関して筆者がすぐに思い浮かべることのできる箇所であるが、前古典期および古典期の詩と散文は「軍が、ポリスが、君に与えた部署を死守せよ」というメッセージに満ち満ちていると言っても言い過ぎではない、と思う。

認識があるとすれば、その世界の中心と周縁という関係の中で行われていると、本稿筆者は読んでいる。そして、中心と周縁という思考の組み合わせが、否応なくそこに歴史認識を包含しているとすれば、中心は文明史的歴史的に進んだ部分、周縁は遅れた部分ということになる。言うまでもなく、アカイア勢の故地たるギリシアの本土がここでは中心である。トロイア勢は周縁に位置するひとびととである。

(北海道大学)